和朝

# 今昔物語

巻之八

世俗部

# 今昔物語 倭部八目録

## ○世俗傳


一 平維衡同致頼合戦蒙処罰語
二 多田満仲家盗賊入語
三 尼衛門尉平致経導明尊僧正語
四 平貞盛射殺盗賊語
五 平貞道有遠慮語
六 上総守維時郎等大紀為小侍被害語


九曜文庫

# 今昔物語 倭部八

## ○世俗傳

一 平維衡同致頼合戦蒙処語

今いむかし。帝の一条院の御時に。下野守平維衡系圖曰帯刀上総介權少將従四位下せいしよ兵おほかりけれい。陸奥守貞盛といふ兵の孫也 考孫當作子 又其弟に平致頼号平五大夫。公雅男。世以致頼。維衡。頼信。保昌。称武勇無雙。といふ兵おほかりけるが。ともに兵の道にいとをしいとなむ思ひたりける。両ぞ者ども有て。欲とりわけをのく領國よりぶ。致頼者。維衡をうんとす。考時長保元年三月也 合戦を都

月日なびく子孫伴數郎等者養屬討死する者數多
さうれいで勝負いまだ分つべし。しかるに朝廷より空えを給び。
維衡をば。左衛門の府より捕に被下。致頼をば。右衛門
の府より捕に被下てぞ。ともに動向をば。皆すんで
參り落ぬ事なをのくさきけらるふきいまるて。
明法勘へていくれそのいうんとしらの致頼が罪。九
なりぬ。すでやうふ者をとこころみかがとべ。清さく
うひしら維衡が罪うる。郷を極し一年ばかりして
ゆるさるべきうべ。ふよんて。公家宣旨紙ばかりを。
致頼をば遠く隠岐國へ流され。維衡をば。淡路國へ

移郷きまわるのちみ義朱致忠 右京大夫右馬權頭從四位下元方男
ゆいつ者。英法國の途中にて。前字廣相男 とい者乃子輔政有二子嫡子曰惟通二男曰好政何嫌
ゆるびに郎等
どの紙射ころをもおれよりて。文輔政ゆかりや事にう
はまえ扱い。宣旨紙ばかりをさして。檢非遠使大夫射
藤原忠祝 考 右衛門志縣犬養為政 犬養姓神亀命十九世孫田根連之後也
多紙。の國うばしたいして。事のれうる紙
勘へ向ふ。致忠をんで咎ん落ぬ。罪名と勘
へらまて。明法ばかりをもて。致忠紙をく佐渡國

ひとくあるこの伝ひ。公家うれしび。罪伝れるひとく。
はひれ事ありとちん。語はしえるかを也

二　多田満仲家盗賊入語

今いむし。天徳四年五月十日の夜。強盗ども。武義
権守源満仲の宅に入こう。満仲れさわいを。一人
射伏くるる。弘重とつる者なり。満仲
弘重に。問新をとりて。中勢に親王第二男親繁
及宮内允中長良村。土佐権守蕃基等伝ひ
検非遠使右衛門志錦文明番内して奏聞。中勢
に親王に家人ひていく。件の孫王今暁親王の家

り入。其同類紀近輔中院良村名。此家よりよん
ゐ事のよりと。親まで告ぶ。親まで告ぶ。
親盤日ころわるく病をわづらひて此家内よりある紀
居よりとこそ平安ならんとてもらて。家ゝとべしやとり。
宮方ふとんゐ。宮人名紀近輔。同類ぬもがゝと。
さぐりしもしるふ。親まの家内りていたりあと二人とこそ
得ど。成子内親まれ家内よりをあく。紀近輔をかゝと
ゐ。近輔がいく。親盤まゐる前で。法仲の家よりあくハ
実なり。さるものとぐゝの親盤まれりんある
べしと。新日親盤ゐ。外よりゐ紀うゝびてゐうゝべし

此なりのちうゝ得ゝりとゐてゝ。ちまびとゝん語
はゝえゝゝ也

三　左衛門尉平致経導師尊僧正語

今昔宮治殿のひんよりゝ。三井寺の
明尊僧正いのりて夜ゐ入まで居ゝ秋ゝ。
僧正宿ゝて。夜内ゐ事のゐをしべ。厩
ゝてゝのゝゝさせざる。馬よのせゝ。
ゐ。此道をゝるべきゝのい。ゐゝ。尋させゐ
ゝしべ。左衛門尉平致経致頼男ゐゝ。ゝゝしべ厩ゝ
と作をゝ。ゝて。ゐ内ゐ僧正。ゐまゝ。僧都ゝて。ゐゝ

仕僧都今夜之井寺に行て夜の明ぬうちに来れ
どもなりそこに供せよと作るぞ。致経其由紙に
つて常に宿直所に弓胡籙をして。薬皆一足と思
乃下にくして賦の下衆男一人をうちぐるぶ此作り
よりて。袴はかせうるくわぎ。薬皆取おしふみ弓胡
籙うさ負て沙馬ひきさそうて出ぬ。僧都
これをそと問て致経とさそふ。僧都之井寺に
ゆんとをる人乃何条うらやましいゆゑ。薬物いかさ
うや問。致経答く歩より来れ作るぞよ。わくれ来
ぐそぐとくれてませといひたれば。僧都いとあやしき
事かなとおもひぐぞ。史をさそはせて行よ。何条
とはたづねうぐみうる人。弓箭籙紙巻てひろふ者
あるぞ来る。僧都これをうけてゆくれうふぐぞ。ぞの
ども致経をみくかしこゆゑて。沙馬作てひさかをとば
致経薬皆ふみおぐる。馬よ乗ぬ。二町ぐらい行て
ぬさうよう。ゆれぐくうぐみうるものうら籙巻
して二人出来く馬乃ひきて添うてれも郎等旅
うう。希有なるものうれとうるぐぞ。二町ぐらう
すぐて同ぐぬうらして出来く折副ぬがくるる紙



致経い何ともいふ事なくして。一町余二町餘行て

二人ばかりそひたりければ、程なく三十ばかりなる僧ふたり、僧都
これをみくるおもきまもりざうれとらしてこ井ちに行
ふたりく作りたる車どもに沙汰してやまざ物ふかく
くるふ。致経三十餘人ばかりそうはきうちうちして行
きたりけれ。そのりうく河原までいそうぞ。車よりいで
後は郎等ども。出来りて車にて二人げにそぎはる
くりけれ。殿乃舘一町ばかりたくいけばかりまうし郎
等二人は御りきう。弟は馬にのりて致経馬よ
りおりてあゆまくりけれ。二人は乗い馬ばかり多くつる
ふり。是よりうの賊男ども。菓殆ばかりたちぐら

將門はおとゝ入道僧都にたのみて馬場の郎等ともに
うち殺くかくされはかくさせよとなりつゝきし人々ある
まつりみしくぞ覚えたる。此致経は平致頼が子也。さて
ろそをあくしても人はさらぐれさりて、みぐしおろしたれ大なる家
を射たる故、世の人大箭左衛門尉といひたるとかや。
かたりつたへたるとなり

## 四 平貞盛射殺盗賊語

今はむかし、下京辺に仏徳ある法師有けり。家ゆ
たかふよろづたからものくてあまたもちたるに、其家
にしあやしきことありければ、賀茂忠行（出羽介江人子従五位下丹波）

權守なりける陰陽師に此度の物怪の吉凶を問ければ、其月
の其日物忌をかたくせよ、盗人のために命をうしなふ
べしといひたり。法師大きにおそれておもひける。其
月の其日になれば門を閉て人もかよはずしてありける。
そのくれがたになりて門をそとよりたゝくものありけれど、
あけさせもせざりければ、きこえたるは、あけよ、人をまつなる。
それよりそれはすなるぞ。国より物もちて待つといひおこせり
けるが、平貞盛（常陸大掾国香男鎮守府将軍陸奥守従三位）が、そのかみ陸奥
国よりのぼりけるとき、此貞盛は此僧と知れみし
き得意にてはありしかば、おしかくるる間なり。貞盛

いひくらかうにぞ今陸奥國よりのぼりつきたれども。
夜よい成るに今夜は家へいかゆきたりとおもふ家
に来りてうちたりけるに物もいはで門。
僧いひ出くるは盗人のうちの命を失ひてし。陰
陽師うらなひしたれば明そらうとして忘れたり
とぞ。貞盛国てきたりわれ用ゐたれよ。貞盛をば
つぎもしびこ名をもるべき紙をかう。何条来れる
その紙をいかにすべきとこへば法師げんりとわれ
厳ぐりへいかへ法師とは名をとへばいとい
貞盛きたりといひて。我ぐりへ郎等も馬も



失うしぬ法師をば物忘うくに物をたれぐしてを奥ふ
いひて其所に放おのうたに居く。舎人をくに名をくに寝ね。
かくうち物ぬまるうちに門をわれと音しなれば貞盛是
ぐ盗人なりんとおもひて。調度うれ負車宿れうれ
ぬりてうくれ居うに盗人に門をあけてはげうくと入
て。南面よりぬぐれうに貞盛やぐて盗人の中に立まぐい
ぬて物ぐもるうる方へいはういさぐ物もちた方法さ
てかくこれこそ和い男をれ家と踏用くいれとをへ
うれば盗人ぐもい已ぐ同類ぐうと仏得てぐれさたれて
すくうに貞盛ゆぐそうと矢打はぐひて中にもぐ

まことの大男の。調度負てゐる奴を。弓ゐて射るに。ひしろより
矛を射おとして。つづけて。弟盛ひしろより射る
ぞ用心せよといひて。ひしろより男を奥の方へ引入れぬ。
さて入者共まつぶ中を射つゝ。かくれいる
ろよ居るぞ。逃よといひて。うち紙も奥の方へ押入て。
奥の方にゐまりてぞ。つゐ引つゐ射ければ。三四人
たおれぬ。それを見て。逃けれども。残る盗人ども。みだれ
それて。門の外へ。ひしろよりさんざに射
くまぶ。又四人射ころしぬ。一人は四五町あげのびて
逃さに射ころしぬ。費ぬ。あるいは。溝の中に多くしに入

ぬ。夜あけて後。其者ども。ひしろ。同数をぞ。ぬぎ
きる。此法師物忘して。弟盛が。いしざ。ゐ。ゐば。そら
まちぬ盗人。ひしろ。ゐるべきに。運はよく。慮かし
ちくて。弟盛を宿し。盗人を殺さをて。己が命を
ゐるとくくりぬ。ひしろ。ものゐたなん。
ゐるとくくりぬ。ひしろ。ものゐたなん。

## 五　平貞道有遠慮語

今はむかし。検非違使平貞道といふ盗人あるとくらまきく
獄にゐれてまけるぞ。大赦によりて。ぞ。ゐれて出ぬ。
ゐるべきところもなくぞ。ゐるべきところもなくぞ。

関山つよゆきてぞうにく虚死をして。路にて。昨日居
う。路を往来をうものどもあしをえくぞつかしう多
死しうる者おうのうん。疱をうたいいぶつどいのじ
まうぞうおうるおうしいうき兵調度員くぞうた馬
ふ家つ。数の郎等眷属を具して。来れうこうとまうう
くうぶかく人おかくおのまうう紙えくぞうる紙そで死て
後者をうとせくえきむぞうの者けをうてうまる紙
えくぞ。疱もうる死人の作うとうつぞ。馬とれ兵もうる多
というやぶうとうもう紙しう馬をひうくぞ死人のわる方
う見紙うをて白をうれぶぞおうまう長うるものどもぞさぶうう

いろ黒しき男の。ゆかくみ郎冬春屋紙具しなどう。
死人は貝紙うきて。用ゐ伝ふるに隠しうるわゆ。ゆ紙
をうしなてひしあざうるをありけさうしいゆさるく
後。死人の名たて人もなかうるふ。ある武士家とある
して。死人のそづみさらうるて。あうれたるうのう邦。
病ともなれが。いうあうて。死うるあんくいらく。ら
をもうて死人を突うれば。死人ゆがてらあうつうさて
物さあうう。の武士紙馬より面くり出ろし。親の歌
をばひくするでいつまくれ。ぱうる刀をうづいうう。
ろうろう紙さし通して。ろうる水干袴いさうづて。

お着て。ら赤縄を面く捧負。その馬うしあて東の
方ようをゆさけう。同じゆうんくうれて。けづう家の
どく。三十人ばうう家のうこより赤うく袴を着て御具。
道ってあう来れ。水干ろう侍。ら矢。弓杖をうづいうも。
んづうかう老づく着しは。弓具とうくの馬に乗て。
三十人ばうはくぷあうとけうしいてづうろれば。ゆそれ
てどづしう老あうをうう。ぷうものいが。ゆ。海あまべ
れをうしき者くう紙をうちう。それをもうべて。
ちうく赤ちそまづひあんまは。死付ざるゆうあん
や。ろれはたそ。げどゆ。ゆ地ろくとばしるを赤いと

かしこうまさりたるものかな。さてしも有まほしき事なんと感じ給ふ。

さるほどに村岡五郎平貞道源頼光四天王ゆゑいとうとくなりぬれば。貞道

盛々に其人と聞てげにさもありなんと云けり。貞道

いまだ若かりける。郎等眷属有まほしけれども。これを知てゆゑ

とぶらひて通ひけり。かくて年ごろ経ぬれば。後者もまた

もの。ちからなく打ゑまれてぞ。これがうへはさぞ〳〵てこそ

ちからをもいれ。あはれにもたのもしく思はれさまほしかりける人哉

人魔縁にけるかな。語はまことにこそ

六　上総守維時郎等大紀為小侍被害語

今はむかし。上総ち平維時朝臣といふ。貞盛が孫にて。



維時が子也。くしたる名也。其郎等に家にあいたちてゆかい

大紀といふ者あり。長さ六尺力強く。ら等打物の達者にて。

膳ちく。思慮有て弁舌よろづけきびなりぶるこの

なりけり。是によりて。維時が一郎等にてぱらひいろ

ふ。大紀を君に召て同僚と雙陸をぞ打ける。

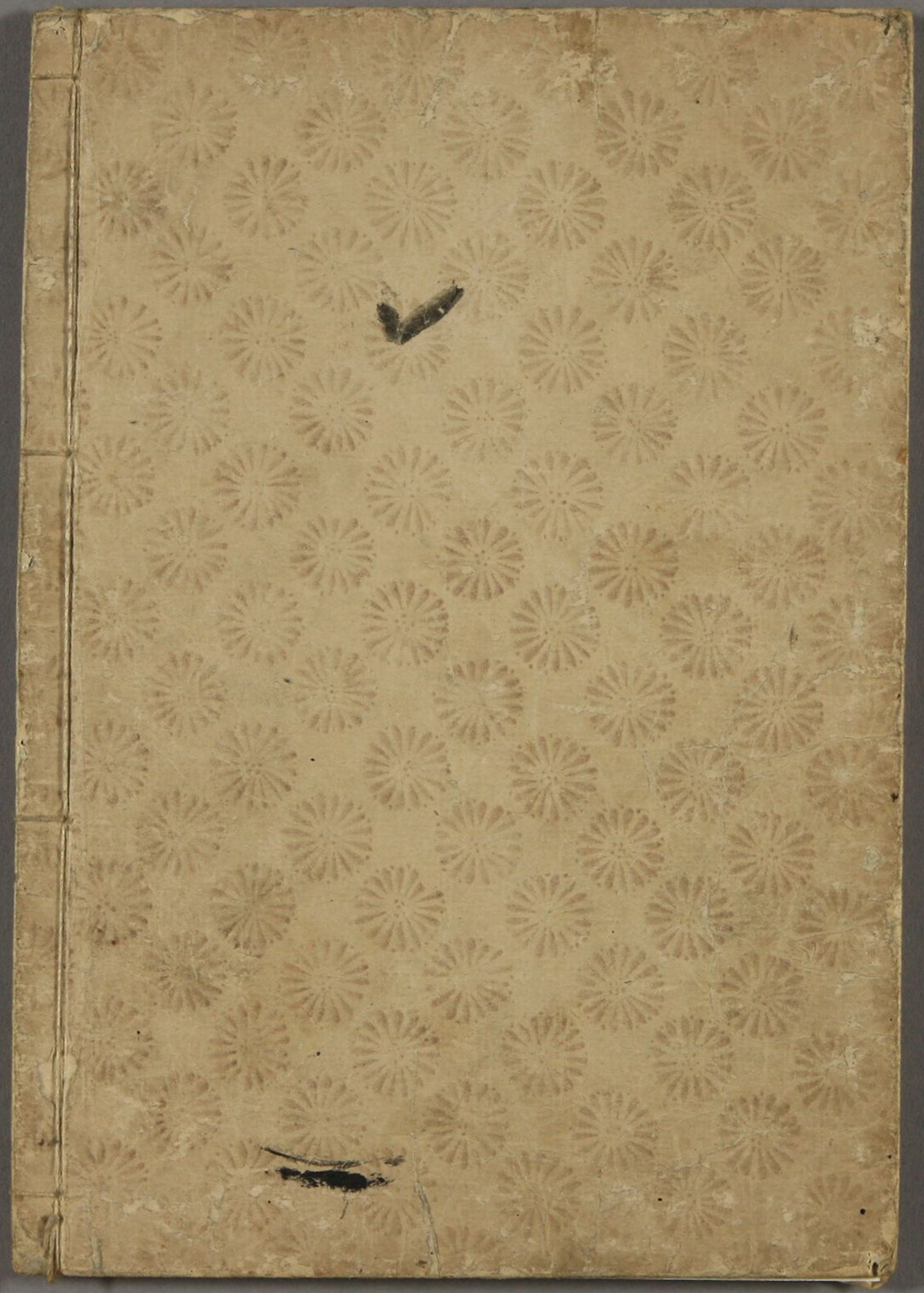
ぞにいみきふ侍りをるに。見物をして。大紀がよく目を

打く同僚にてひづらひ。小男かくてゐあり。

助言しけれども。大紀大いにうて。負まれ和後いかくとるぞと

いひて小男が眺を筒尻にて突々れぬべきまで強く突

ぬれば。大紀が顔を突々れぬべき強力の者にぞ。

ざしいぶかきたる紙ろくと。大紀が片くろ刀と引抜て。大紀が
乳のもとに紙つきあてゝ力を入さげゐぐらぶげて行くり。雙陸
の相手もうつくえくとぞ得ざりける。大紀い大事の面
をつくまもれいぞうつくて孔めうり。其所一家に居た方く
のもとさうだくれた跡をくて海て失にくりぬ。小男が影いい。
大紀がゆゑにてもめくる海ぐうに。ぶかくゆくくを一刀につき
ころされぬまべきよりとはぐくくれくをあげさくり。物い
あやぐくぶき事なりうとうん語つくえくくも

今昔物語八